

伊能図探究

NO 2
平成7年3月1日
伊能日本図探究会

—現存する伊能図を尋ねて—

伊能日本図探究会発足に寄せて

桐蔭学園横浜大学 工学部教授 越川 常治



伊能忠敬という人物について改めて関心と呼び覚められたのは、テレビで彼の足跡が、ノンフィクション形式で放映されたのを見てからである。私の祖父は千葉県佐原市(昔の香取郡佐原町)の住人であったことでもあり、同郷の親近感のようなものを抱き、それとなく脳裏に刻まれたと言えよう。

渡邊氏が伊能図に傾倒しているのを知ったのは、同氏が前任のコビシ電機の副社長をして居られた頃であったと記憶している。何やら難しそうな古文書と格闘している彼が、私の領域では考えられない別世界の学者に見えて、何と奇恃なことかとも思い、また、異様な情熱に畏敬の念を抱かされたことが、ついこの間のことのように思い起こされる。

渡邊氏と私は、終戦直後同じ学舎で席を並べた旧友の間柄であり、戦後の混沌とした時代に、前途の予測もつかずただ学問をしたい一心で、飢えに耐えながら無我夢中で一日一日を生き抜いてきた仲間である。

ともに電気通信省(後の電電公社、現在のNTT)に就職し、渡邊氏は本社の技術畑でデータ通信事業の開拓に力を奮い、私は電気通信研究所で音響の研究者としてスタートをきり、色々の変遷を経て現在に至っている。つまり、二人とも、れっきとしたエレクトロニクスのエンジニアである。

電気通信工学や電子工学と伊能図がどのようにして結びついたかは知る由もないが、渡邊氏が伊能図のとりこになられたきっかけについて、敢えて身勝手な憶測を許して頂ければ、同氏が以前から四国、九州などの古刹巡りを良くされて居られたことなどが、機縁になったとみるのは如何であろうか。

私自身は全くの素人であるが、渡邊氏の壮図を意として出来得る限りのバックアップをさせて頂き、貴重な文化遺産の発掘、解明、保存に多少なりともお役に立つことが出来れば幸いである。

(会友、前電気通信大学電子工学科教授、工博)

— 目 次 —

成田山仏教図書館蔵 伊能中図と東京国立博物館蔵 伊能中図の比較	2
<参考> 日本学士院蔵伊能中図	5
文政4年伊能中図一覧表	6
豊橋藩主大河内家	6
成田中図の伝来	7
フランスの伊能中図	7
事務局便り(グリニッチ小図複製 忠敬生誕250年シンポジウム)	8
編集後記	8

成田山仏教図書館蔵伊能中図と東京国立博物館蔵伊能中図の比較

渡辺 一郎

1. 一般的な対比

まづ全体像について対比する。

(1) サイズ

区 分	東 博 中 図	成 田 中 図	(参考)日本学士院中図
北海道 東 部	196.5×153.5cm	170×160cm	171×157cm
北海道 西 部	240.5×150	243×158	232×157
奥 州	230×162	213×161	228×158
関 東	280.5×150.5	273×159	266×156
中部・畿 内	237.5×147.5	229×160	240×157
中国・四 国	219.7×130.8	219×158	215×157
九州 北 部	169.5×154.3	172×159	169×156
九州 南 部	167×162	160×159	157×157

両図とも大差がない。明治期に、東大に保管されていた副本から複製した、日本学士院の伊能中図と比較しても差がない。

(2) 彩 色

東博中図は彩色の退色がなく、全体的に濃い色彩で、水色、山地の緑がはっきりしている。これに対し、成田中図は退色があり、また、遥かに淡彩である。

(3) 作成時期・伝来

東博中図の写真目録には、江戸時代末とある。豊橋藩主大河内家に伝えられたもので、筆者が実見の際、収納する木箱のなかには、大河内正敏氏にあてた日本学士院の菊池大麓氏の借用状が入っていたように伝来は確かである。大河内氏は天明から文化にかけて長く老中を勤めているので、その縁で複製させたものかも知れない。秋岡武次郎氏によると昭和24年に東博に寄付されたものという。

成田中図は作成時期、伝来共に不明である。入手経路などについて図書館に依頼した調査結果は別項のとおりである。対比して眺めた場合、時期的に成田中図のほうが古いことは間違いないと思われる。

(4) 針穴の有無

両図共、針穴は明瞭で、突手本といわれるもので、甲乙の差はない。

(5) 文 字

文字、その他記入事項を書込む作業は、何人かで分業で行なわれたらしく、途中から手が変わっており、甲乙つけ難いが、成田中図の方が概して文字は達筆である。東博中図の方が成田中図より少し粗な感じがする。

(6) 記入項目の精粗

測量下図から忠実に針で写されたのは測線のみであって、その両側に書き込む、沿道風景、町村名等の記入については、両図で可成りの差がみられる。例をあげると次のとおりである。

- ア. 駅町、村落名の記入位置：測線の上下又は左右と反対の位置に書いたものがあり一定しない。
- イ. 地名の書込み方向：地名の書込み方向にも上下左右の差があり一定でない。
- ウ. 山岳の書込みの省略がある。
- エ. 経緯線の省略：経緯線は図の余白をつないで描いているが、成田中図、学士院中図では小さな余白にも忠実に書込んでおり、東博中図では小さな余白は省略している。
- オ. 記入事項の脱落：●印（郡界）、丌（神祠）、△（仏寺）、☆（天測実施地点）、などの表示、および地名そのものの脱落がみられる。これらの表示は、製作にあたり余り意識しなかったとも考えられるが、郡界や地名などは書かねばならない項目なので、脱落と考えるべきであろう。

2. 記入項目の精粗の比較

全国から12ヶ所のブロックを選び、記入項目の相違点を抽出したものを表1に、また前号に添付した成田中図部分拡大図（奈良）の範囲内における相違点を表2に示す。

表1でみると、相違箇所は31ヶ所で、そのうちどちらが良いとも云えない、右書きか左書きか、上からか下からか、というような違いが10件（うち1件は方位の違いであるからいずれかが誤りであるが、判定が出来ないので優劣なしとした）である。1方において他方に書いてない項目は、書いてある方が正しいとみなし優位にあるものとする、成田中図の優位が13件、東博中図の優位が8件となり、成田中図がやや優位にある。

表2では、同様に比較すると全相違ヶ所10件のうち、成田中図の優位6件、東博中図の優位3件である。

表1 東京国立博物館の伊能中図と成田山仏教図書館の伊能中図の部分的な比較

地域別	比較項目	東京国立博物館の伊能中図	成田山仏教図書館の伊能中図
1. 富士山付近	富士山の文字の位置と大きさ	富士山頂の北側に大きく記入。	富士山頂から北に少し離れた位置に小さな文字で記入。
	富士山付近の経線	富士山の南側および北側の内陸部の経線は記入されていない。	富士山の南側、北側の内陸部にも経線が記入されている。
	伊豆半島内陸部を横断する緯線	伊豆半島内陸部を横断する緯線は記入されていない。△	伊豆半島内陸部を横断する緯線が記入されている。○
	八ヶ岳の描図の有無	あり。○	なし。△
	宝永山の文字の位置	宝永山の文字は山頂の下に記入されている。	宝永山の文字は山頂の北側に記入されている。
	大河内岳の方位線の方位の違い1箇所	丑八分。	丑八分半。
	大河内岳、愛鷹山付近の山並	密度が高く重なって描かれる。○	密度が疎で、重なっていない。△
	☆マーク（天測地点）の有無	比奈村、吉原にマークがない。△	比奈村、吉原にマークがある。○
	●マーク（郡界）の有無	東柏原村（駿河）マークあり。○	東柏原村にマークがない。△
	村山郷の☆の有無	なし。△	あり。○
	地名の文字の向きが反対	深山村 旧名須山村	深山村 旧名須山村
2. 児島半島付近（岡山）	田の口村の☆印の有無	なし。△	あり。○
	キオム山の記入	なし。△	あり。○
	大島付近の3つ小島の島名	なし。△	あり。○
	丸山島北側の港の印	あり。○	なし。△
	児島湾沿岸の村名の記入位置	主に湾内で、17ヶ村あり。	主に陸地で、湾内は5ヶ村。
3. 飾東郡（姫路付近）	姫路付近の●マーク、神社の印および姫路城の記入	姫路城のほか、8箇所成田図より多い。○	姫路城の印の記入がない。東博の図にある8箇所がない。△
4. 宍道湖付近	宍道湖の文字の方向	左から右へ。	右から左へ。
	宍道湖 湖岸の地名	北岸の村名は北向き。○	北岸の地名南向き。村名の省略が多い。△
	湖岸の測線	描図が粗である。△	描図は精密である。○
	記入事項の精粗	日吉村の神社がない。熊野神社の記入がある。○	●マークが4箇所少ない。日吉村の神社はあるが、熊野神社がない。△
5. 厳島、江田島付近	厳島、西能美島、東能美島、江田島、瀬戸島、倉橋島、大黒神島、の文字の方向	北から南に、北を上にして記入している。	南から北へ、南を上にして記入している。
6. 津山付近	内陸部の緯線：塚田村－原田三方村辺および勝南郡の郡名を横断する線	記入がない。△	記入されている。○

地域別	比較項目	東京国立博物館の伊能中図	成田山仏教図書館の伊能中図
7. 大三島付近	大三島の島名の記入方向、☆マーク等	大三島の文字は北から南へ。他の島名も同じ。☆マークなし。△	大三島の文字は南から北へ。他の島名も同じ。☆マーク2個○
	生口島について	地名12箇所。集中する方位線2本。△	地名13箇所。集中する方位線4本。○
8. 北海道厚岸付近	地名の省略	リイルイとシュマジュンベの間にシュニレウスの地名が見える。○	シュニレウスの地名は記入されていない。△
		アイカッフ岬の付近の地名ノタンの記入がない。△	アイカッフ岬付近にノタンという地名がある。○
	緯線の記入	成田図の緯線の位置に緯線の記入はない。△	アイカッフ岬内側の湾内と、厚岸東方の内陸部に緯線の記入がある。
9. 根室半島の付近	記号・地名の省略	ハナサキ岬は記入されているが、地名のハナサキと○印の記入はない。△	根室半島北側にハナサキの地名と○印がある。○
10. 桜島	桜島の島名の記入方向	横向きに縦書きで、右から左へ桜島と記す。(宍道湖の場合と逆方向)	横向きに縦書きで、左から右へ桜島と記す。(宍道湖の場合と逆方向)
11. 屋久島	島名の字画	屋久嶋	屋久島
12. 甌島郡	甌島郡のラベルの位置	下甌島の西方の海上にある。	下甌島の東方の海上にある。
13. 比較		○印：8件 △印：13件 無印：10件	○印：13件 △印：8件 無印：10件

注) ○印：優位の項目、△印：優位でない項目、無印：優劣なし。

表2 前号添付の成田中図中部部分図(奈良)の範囲の差異

東 博 中 図	成 田 中 図
竜門山の西に千殿山が記されていない。△	千殿山の記入がある。○
八井内町に☆がない。△	☆印(極度測地)がある。○
外山村のㄱが街道から入ったところにある。	街道沿いにㄱ(神祠)がある。
磯村の△印(仏寺)がない。△	磯村に△がある。○
三条村に●印(郡界)がない。△	三条村に●がある。○
奈良に☆△がない。△	奈良には☆△がある。○
葛下郡の郡名ラベルの付近で経線の記入が部分的に省略されている。△	左記部分の経線の省略はない。○
高取、中落村に●印の記入がある。○	高取、中落村間に●印の記入がない。△
岸田村に●印がある。○	岸田村に●印がない。△
清水谷、芦原村間に●印がある。○	清水谷、芦原村間の●印がない。△
脱落ヶ所 計6件	脱落ヶ所 計3件



图 2-1 成田山仏教図書館蔵 伊能中図部分 富士山



图2-2 东京国立博物馆藏 伊能中国部分图 富士山

3. まとめ

東博中図は代表的伊能図とされているが、詳細に比較すると、以上の観察のとおり成田中図の方がやや完成度が高いと考えられる。

日本学士院中図は明治期の模写ではあるが、当時存在した伊能家提出の副本を、研究用に模写したもので忠実な複製と考えてもよいであろう。同図の彩色は東博中図と成田中図の中間的であり、記入内容（例えば経緯線の省略）は成田中図に近い。

伝来については、東博中図は明確であるが成田中図は不明であり、東博中図に一步を譲る。両図とも最終版伊能中図の双壁であることは間違いないが、若干の差があると考ええる。

<参考>

日本学士院の伊能中図（明治末年頃の複写）

1) 整理名 日本輿地全図

2) 整理番号 092・I/1-1・1-8

3) 体裁 紙本着色 装丁2舗（関東、畿内） 巻物6舗 全8枚

4) 経緯

明治の末年、大谷亮吉氏が当時の帝国学士院の委嘱により、伊能忠敬伝を作成し始めたとき、資料として複製されたものと考えられる。文政4年上呈の最終版の中図の写しである。当時、幕府に上呈された正本は紅葉山文庫で明治初年に焼けて存在しなかったため、その後、伊能家から献納されて東大にあった副本から明治42年（1909）に作られた。

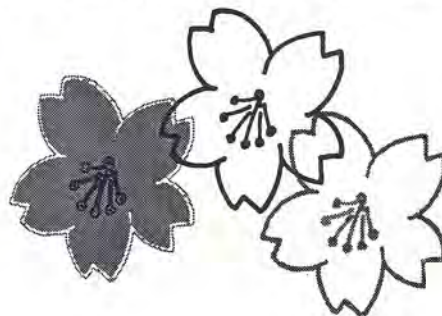
東大の副本は、関東大震災（大正12年）で焼失したから、副本の内容を記録を目的に模写した数少ない図といえる。

5) 特徴

複写の方法はどのようにしたのであろうか。当然ながら針穴は見あたらない。半紙よりも少し大きい和紙を張り合わせてある。和紙をかぶせて写しとり、接合し裏打ちしたのかもしれない。大切に保管されているので、色彩は鮮やかである。退色はない。濃淡は程よく、東京国立博物館の中図よりは淡いが、成田図書館の図よりは濃い。

高山に集中する方位線は細いが、明瞭である。書き込みの字体は丁寧な達筆で、誤り訂正箇所は僅か。経緯線を黒線に入れるが、目障りな感じはない。

畿内図で、中線は京都、方位線の最も集中しているのは加賀の白山で、12本である。虫食いは当然ながら全くない。帝国学士院図書の角印だけ押してある。専門家の複写であり、当時の面影を伝えているものと思われる。



文政4年伊能中図一覧表

所 蔵 者	概 況
成田山仏教図書館	8 鋪完全揃。美品。伝来不明。昭和15年購入。突手本。
東京国立博物館	8 鋪完全揃。美品。豊橋藩主大河内家旧蔵。昭和24年に東博に寄贈。突手本。
東京大学総合研究資料館	関東を欠く 7 鋪。美品。伝来不明。針穴は未調査。
天理大学付属図書館	10 鋪構成。佐渡および対馬・五島を別葉とする。汚れあり。接合子なし。
国土地理院	天理大の中図と同系統の中図。明治期に 6 鋪模写。昭和24年東博中図より 2 鋪を補写。佐渡、対馬、五島を欠くという。
日本学士院	8 鋪揃。明治42年、当時東大にあった副本を模写。大谷亮吉著「伊能忠敬」執筆用資料。
イブ・ペイレ（仏、パリ郊外、個人）	8 鋪。伊能中図であることはわかるが細部は不明。伝来不明。
国立歴史民俗博物館	中・四国の 1 鋪。秋岡武次郎旧蔵。汚れあり。
岡山藩池田家旧蔵	終戦後売立てられたという。現蔵者不明。沿海地図の誤認も考えられる。求む情報。
北海道大学付属図書館	北海道の部 2 鋪。後年の複製という。

以上のほかに文政4年中図の存在をご承知の方はご教示下さい。

—— 豊橋藩主大河内家 ——

東博中図を伝えた大河内家の姓は松平で、松平信綱の後裔である。正徳2年（1712）松平信祝が下總の古河から三河国吉田に7万石で入封した。享保14年（1729）、遠江浜松に移封となったが、松平信復の寛延2年（1749）再び吉田に戻り、以後明治まで続いた。明治2年に吉田は豊橋と改称され、豊橋藩となった。

吉田藩主松平伊豆守信明^{のがきら}は、天明8（1788）から享和3年（1803）までの15年8ヶ月と、文化3年（1806）から文化14年（1817）までの11年3ヶ月にわたり老中を勤めている。

丁度、伊能忠敬が測量行をつづけていた時期に幕閣に列しており、当然測量途上の上呈図は見ているものと推定される。ただ、最終上呈の文政4年には老中の席にはいない。後年、松平伊豆守信順が天保8年（1837）から天保9年まで1年3ヶ月老中の列にあったが、以後藩主が幕閣にあったことはない。

森洗三氏が著作集5において、小宮山楓軒の自筆本「懷宝日札」（帝国図書館蔵）の第11冊に、忠敬と特別に緊密な関係にあった久保木清淵の語るところとして、つぎのような記事を紹介している。

「勘解由57才の申の年蝦夷測量のこと命ぜられ、往来略筋を測量して上つりしに、松平伊豆守これを見て、迎ものことに関東を測量せんこと可なりとまうされしに起りしとなり。始は10年にして功を終るつもりなりしが、10数年を経たりしとなり」

この松平伊豆守は松平信明である。信明のひと言が伊能全国測量のキッカケとなったことを思わせる文である。とすれば、大河内家と伊能図は切っても切れない縁となる。

そうでなくても、大河内家は当時の幕府の要路者に変わりはなく、伊能図があった理由は充分ある。

—— 成田中図の伝来について ——

成田中図は現存する最終版伊能中図のうちでは最高のクラスに属するが、伝来が明らかでないのが残念である。

成田山仏教図書館にお願いして調べて頂いたところでは、昭和15年に、成田の町の宇宙堂という書店が納入したそうである。この店は今は無く、係累の方もおられないという。資金は成田山から出ており、図書館には全く記録がない。図書の受入等の詳細な記録を残された係の方がいたが、その方も記録していない。お寺の記録は非公開である。多分、旧持主のことは書いてないだろう。

思うに、第2次大戦の開戦前年の昭和15年に、手放された方は公にしなかったのであろう。また、購入した成田山側もこれだけの品物を伝来等を全く聞かずに買ったとは思われない。お互いの約束で、世のなかには云わずに、後世のために成田山が引受け、成田山仏教図書館（当時は成田図書館）が静かに保管してきたものかも知れない。

秋岡武次郎、保柳睦美、等これまでの伊能図研究者は成田中図を非常に軽く扱っているし、少し時代が古いが、大谷亮吉は存在にさえ触れていない。

すでに戦後50年、伊能図を伝えたであろう旧大名家等はすべて再編成された今日、伝来を明らかにしても何等支障はないであろう。関係者のご協力をお願いしたい。

宇宙堂は、成田山仏教図書館に奈良絵本の住吉（重要美術品）なども納入しているという。恐らくは、東京の有力な古書店が扱い、宇宙堂は成田山への納入窓口をつとめていたのではなかろうか。

佐倉の旧領主が堀田家で、地縁的に堀田家にあったのではないかと、一時考えたが、堀田家の文書類からは発見できなかった。また伊能全国測量を担当した若年寄の堀田攝津守は分家の方で、佐野である。堀田説を否定はしないが、全国のすべての大名家が調査対象と思われる。（95. 1. 15）

—— フランスの伊能中図 ——

フランスの伊能中図は、パリのオルリ空港の近くに住む、国立高等農業学校の教授のイブ・ペイレ氏が所蔵しているものである。昨年11月に三男のジャン・ペイレさん（27才）と会い、彼を通じて調査させて頂く了解を得ている。ジャンさんは、都立大学大学院に給費留学生として在日中で、奥さんは日本人である。テーマは遺伝子の研究という。イブさんは地質、水利の先生とのことで、地図と全く無縁ではないが、伝来は分からないとのこと。長兄はドクター、次兄は建築技師と技術屋一家のようだ。

4番目がマリアンヌといい、研修で日本に来日したことがあり、その際、勸日本地図センターの金窪氏と面談している。持参した数枚の部分写真（サービサイズ）と、原図の大きさ、8枚を接合すると日本全図になるということから、文政4年の伊能中図であることは間違いないと思うが、完成度、保存状況等はわからない。3月27日、28日に現地調査の予定である。

事務局便り

英国グリニッチ国立海事博物館蔵文政4年伊能小図3枚揃の複製

英国より複製承認の通知がきて、準備を進めている。伏兵は以外な処にあった。大型の印刷用紙は特注しないと入手できないとか、大版の印刷機は極めて一部の印刷会社しか保有していないことがわかった。

地図の出版屋さんベースの話だと、どうしても、特別な紙を造り、大手印刷会社に依頼して、豪華本とし、300部も売ればよい、といった発想になって了う。

それでは、広く伊能忠敬の作品(=地図)を紹介したい趣旨に反するので、悩んでいる。現在のところ、紙も印刷屋も選択の余地のあるB全版(765*1085)を使い、北海道1枚、本州中央部3分割、西南部1枚の全5枚とすることを考えている。このサイズなら、本州中央部は文字が容易に読めるし、北海道・西南部も少し注意すれば読み取り可能と考えられる。

佐原市で忠敬生誕250年シンポジウム

太陽歴になおした伊能忠敬の誕生日は、2月10日である。95年2月11日、佐原市公会堂で生誕250年記念のシンポジウムが開かれた。郷土史家の小島一仁氏の講演と、忠敬の生き方と高齢化社会のあり方をめぐって、パネルディスカッションがおこなわれた。

小島氏は、松本清張が『伊能忠敬の測量事業は佐原とは関係ない』といていることに反論し、伊能家は町の名主を務める家柄であり、暦数の文献を伝世しており、彼自身利根川流域にて実地測量の経験もあるところから、この途に進んだもので、忠敬を世に送ったのは佐原の風土であると述べていた。

思うに忠敬が佐原以外の出身であったとした場合、全国測量を行ったかどうかは分からない。他では麻田剛立もその気があれば機会はあったわけで、原動力は忠敬自身の出自と佐原における経験であった可能性は大きい。

編集後記

第2号をお送りします。当会々友の越川常治氏(桐陰学園横浜大学教授)より玉稿を賜りました。厚くお礼申し上げます。越川教授は超音波の権威で、潜水艦の通信システムから、イルカの会話まで、超音波を使うことなら何でも手がけている方です。本誌について全面的に御協力いただいております、心強く思っています。

フランスのイブ・ペイレ氏から3月下旬の伊能中図の訪仏調査OKの回答が寄せられました。図の内容、保存状態、ペイレ氏宅の撮影スペースの有無、伝来を推定できる手懸りがつかめるか等色々思いを馳せています。

パリで通訳を頼んで、2日間の予定で訪問しますので、結果をお待ち下さい。翌々号で報告のつもりです。次号は日本における伊能小図の行方探しの過程で浮上した静嘉堂文庫蔵伊能特別小図をとりあげたいと考えております。

伊能図探究 No. 2

発行 平成7年3月1日
編集発行 伊能日本図探究会 代表 渡辺 一郎
撮影協力 小山 弥雄
所在地 東京都文京区本郷1-27-8-A1007
TEL&FAX 03-3818-0792
(昼間 TEL 03-5261-1801 FAX 03-5261-1803)